

- (1) 人ヲ殺シタル罪ニ付刑ノ言渡アリタルモ其ノ殺サレタリト認メラレシ者犯罪後生存シ又ハ犯罪前已ニ死去シタル確證アリタルトキ
 - (2) 同一ノ事件ニ付共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受タル者アリタルトキ
 - (3) 犯罪アル以前ニ作リタル公正證書ヲ以テ當時其ノ場所ニ在ラサルコトヲ證明シタルトキ
 - (4) 被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受タル者アリタルトキ
 - (5) 公正證書ヲ以テ訴訟記録ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタルトキ
 - (6) 判決ノ憑據トナリタル民事上ノ判決他ノ確定ト爲リタル判決ヲ以テ棄却若クハ破棄セラレタルトキ
- 再審ノ申立ヲ爲シ得ヘキモノ左ノ如シ

- (1) 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事
 - (2) 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事
 - (3) 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル上告裁判所ノ檢事
但シ司法大臣ノ命令ニ依リ又ハ職權ヲ以テ其ノ訴ヲ爲ス
 - (4) 刑ノ言渡ヲ受タル者
 - (5) 刑ノ言渡ヲ受タル者死去シタルトキハ其ノ親屬
上告裁判所ニ於テ再審ノ理由アリト認メタルトキハ原判決ヲ破毀シ原裁判所ト同等ナル裁判所ニ移シ更ニ通常ノ手續ニ從ヒ裁判ヲ爲サシムヘキモノトス
- 再審ノ末無罪ノ判決アリタルトキ又ハ死者ノ親屬ヨリ再審ノ申立ヲ爲シ原判決ヲ破毀シタルトキハ其ノ者ノ名譽ヲ回復セシムル爲メ其ノ判決ヲ公示スルモノトセリ

第十一 特別權限ニ屬スル訴訟手續

特別權限ニ屬スル訴訟手續

刑法第二編第一章及ヒ第二章ニ掲ケタル重罪並ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處スヘキモノ及ヒ勅任官ノ犯シタル重罪ニ付テハ舊治罪法ニ於テハ上裁ヲ經テ高等法院ヲ開キ元老院議員大審院判事ヨリ選任シタル七名ノ裁判官ヲ以テ組織シタル合議體ニ於テ裁判スヘキ規定ナリシヲ現行刑事訴訟法ニ於テハ其ノ中勅任官ノ犯シタル重罪ナル一項ヲ削除シ其ノ他ノ事件ニ付テハ之ヲ大審院ノ特別權限ニ屬スル事件ト爲シ豫審及ヒ裁判ハ大審院ニ屬スヘキモノト爲シ檢事總長之カ搜查ヲ爲シ大審院長特ニ豫審判事ヲ選定シ第一審ニテ終審トシテ大審院之カ判決ヲ爲スヘキモノトセリ

現行刑事訴訟法規定ノ概畧

現行刑事訴訟法

今現行刑事訴訟法ニ於ケル規定ノ梗概ヲ列舉スレハ大畧左ノ如シ

第一編ヲ總則ト爲シ公訴私訴ノ目的及ヒ其ノ訴權ノ消滅原因時効ノ期間期限ノ起算文書作成ニ關スル手續等ヲ規定シ

第二編ヲ裁判所ト爲シ其ノ第一章ニ於テ裁判所ノ管轄ヲ規定シ第二章ニ於テ裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避回避ニ關スル原由及ヒ其ノ手續ヲ規定シ

第三編ヲ犯罪ノ搜查起訴及ヒ豫審ト爲シ其ノ第一章ニ於テ搜查ノ機關ヲ定メ更ニ之ヲ二節ニ分チ其ノ第一節ニ於テ搜查ノ端緒タルヘキ告訴及ヒ告發ニ關スル手續第二節ニ於テ現行犯罪ニ關スル規定ヲ置キ

其ノ第二章ニ於テ起訴ノ手續ヲ規定シ其ノ第三章ヲ豫審ノ規定ト爲シ更ニ之ヲ十節ニ分チ其ノ第一節ニ於テ令狀ノ種類條件效力形式執行ノ手續ヲ規定シ第二節ニ於テ密室監禁第三節ニ於テ證據ノ規定ヲ置キ第四節ニ於テ被告人ノ訊問及ヒ對質第五節ニ於テ檢證搜索物件差押第六節ニ於テ證人訊問第七節ニ於テ鑑定ニ關スル要件形式手續ヲ規定シ第八節

ニ於テ現行犯ノ豫審ニ關スル特別手續ヲ規定シ第九節ニ於テ保釋責付ノ手續ヲ規定シ第十節ニ於テ豫審終結ニ關スル處分ヲ規定シ

第四編ヲ公判ト爲シ其ノ第一章ニ通則ヲ置キ公判全部ニ涉ル一般ノ手續ヲ規定シ第二章ヲ區裁判所公判第三章ヲ地方裁判所公判トシ何レモ其ノ裁判所ニ特有ノ手續ヲ規定シ

第五編ヲ上訴ト爲シ其ノ第一章ヲ通則トシ第二章ヲ控訴第三章ヲ上告第四章ヲ抗告ト爲シ各其ノ上訴ニ特別ナル要件手續ヲ規定シ

第六編ヲ再審ト爲シ再審ノ要件其ノ申立ヲ爲シ得ヘキ者及ヒ審判ノ手續ヲ規定シ

第七編ニ於テ大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟手續ヲ規定シ

第八編ヲ裁判執行、復權及ヒ特赦ト爲シ其ノ第一章ニ於テ裁判ノ執

行ニ關スル方法手續ヲ規定シ第二章ニ於テ復權第三章ニ於テ特赦ニ關スル各要件及ヒ其ノ手續ヲ規定セリ

以上數項ハ我カ刑事訴訟法ノ大綱ニシテ實ニ刑事手續法ノ要領タリ此ノ一斑ノ記述ハ以テ規定ノ全豹ヲ察スルニ足ルヘシ而シテ三十二年三月法律第七十三號ヲ以テ刑事被告人ヲ密室ニ監禁スルノ制ヲ廢シ又公判ニ於テ被告人自カラ辯護人ヲ選任セサルモ其ノ被告人カ幼者婦女其ノ他辨識力ノ不充分ナル者ト見ルヘキ一定ノ場合及ヒ裁判所カ辯護人ヲ必要ト認ムル場合ニ於テハ裁判所ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ニ辯護人ヲ付スルコトヲ得トシ其ノ他二三ノ點ニ於テ修正ヲ加ヘタリ今ヤ刑法大修正ノ準備モ著々其ノ歩ヲ進メツ、アルカ故ニ之ニ伴フテ刑事訴訟法ノ一大修正ヲ見ル蓋シ遠キニ非サルヘシ

民法商法及ヒ民事訴訟法

民法

民法ノ起源及ヒ
進步發達ノ沿革

第三章 民法、商法、及ヒ民事訴訟法、

第一節 民法

我國古來民事ノ法典ナシ、大寶年間ノ律令ノ如キハ較、法典ニ類スルノ體裁ヲ爲シタリト雖モ當時民俗簡易ニシテ細密ナル法則ノ設定ヲ要セス故ニ之ヲ今日ノ法典ニ對比スレハ素ヨリ大ニ其ノ體裁ヲ異ニシタルモノナリキ、德川氏時代ニ於テ民事ニ關スル成例ナキニ非ザリシモ其ノ成例タル或ハ舊時ノ政令ニ因リ或ハ各地ノ民情ニ基キテ一定ナラス要スルニ封建割據ノ制ニ依リ各地ノ交通頻繁ナラス隨テ人事ノ關係自カラ單簡ナル上ニ各地甚タ區々ニ涉レリ且ツ強大ナル家族制度ノ確立ニ因リ社會ノ交通ニ於テ法律關係ヲ生スルモノ多カラス、是ヲ以テ民事ノ法制ハ人事ニ關スルモノヲ除キテハ一般ニ未タ發達ノ域ニ至ラス隨テ民事ナル觀念粗雜ナルヲ免レス、例ヘハ民事ノ法則

ニ附スルニ刑事ノ制裁ヲ以テスルカ如キ是ナリ、要スルニ德川氏ハ武斷ヲ以テ爲政ノ要訣ト爲シ且ツ民ハ之ニ由ラシムヘシ之ヲ知ラシムヘカラストノ主義ヲ取レリ、故ニ民事ノ法制ニ付キテハ格別重キヲ置カス概テ道德及ヒ習慣ニ基キ裁判ヲ爲シタルノミ從テ裁判官ノ依ル所ハ道德ヲ經トシ習慣ヲ緯トシタルモノ、如シ
前述ノ如ク民事ノ法制發達シタルモノナク且ツ其ノ慣習區々ニ涉リ殆ント一定ノモノナキヲ以テ茲ニ德川氏時代ノ民事ニ關スル法制ヲ記述スルコトヲ省略シ（其ノ法制及ヒ慣例ノ概要ハ司法省出版「維新以後民法編纂ノ沿革、明治二十三年制定ノ民法并現行民法ノ大要」ヲ敘述シ以テ民事ニ關スル法制ノ發達進步ヲ示明セントス
民法制定ノ沿革ヲ述フルニ先チ爰ニ一言スヘキハ維新以後我國法學ノ進步ナリトス、維新以前ニ在リテハ法學トシテハ彼ノ唐明清刑律ノ學ヲ講スルノ外ニハ殆ント其ノ途ナカリシ、外國トノ交通開ケテ以來

一般ニ歐米ノ學術輸入セラル、ニ從ヒ佛蘭西法先ツ入りテ法理講究ノ開眼トナレリ明治ノ初メ制度取調局ニ於テ佛國法典ノ翻譯アリ是レ泰西法典ノ我カ國語ニ翻譯セラレタルノ嚆矢トス明治五年七月司法省ニ法學校ヲ置キ佛語ヲ以テ法律學ヲ教授セシム此ノ時ニ當リ我國ノ法學社會ニハ佛國法律ヲ講究スル者最モ多シ其ノ後獨逸學亦漸ク發達スルニ至レリ又政府夙ニ法科大學ヲ設ケ之ニ英法ノ講座ヲ置ク該科ノ學士漸次法學社會ニ輩出シ其ノ勢力重キヲ爲スニ至レリ法科大學ニ於テハ當初英法ノ講座ノミヲ設ケタリト雖モ明治十八年ノ頃ヨリ英佛獨ノ各法ニ關スル講座ヲ設ケタリ隨テ學者ヲシテ單一國ノ法律ヲ研究スルヲ以テ満足セス汎ク各國ノ法理ヲ比較對照シ之ニ加フルニ沿革法理ノ研究ヲ以テスルコト最モ必要ナルコトヲ感セシムルニ至レリ以上述フル所ハ單ニ學者ノミナラス司法官辯護士等ノ實務家ニ於テモ亦其ノ影響ヲ受クルヲ免ル、能ハサリキ故ニ司法

官辯護士等ハ表ニ舊慣若クハ既成ノ法文ヲ論據トスルモ暗ニ自己ノ學修シタル國法ノ法理ニ基キ立論スルコト少ナカラス是レ一ハ民事ニ關スル成文法ノ不備ナルト一ハ封建割據ノ餘各地其ノ習俗ヲ異ニシ維新後未タ一般ニ涉ル慣習ノ確立セルモノ甚タ少ナキカ故ニ實務ヲ處理スルニ於テ必要已ムヲ得サルニ出ツルモノナリ

維新ノ後政府ハ諸般ノ行政制度ヲ改革スルト同時ニ諸法典ノ制定ニ著手シ銳意其ノ成功ヲ企圖セリ政府カ民法ノ編纂ヲ必要トシ其ノ成功ノ急速ヲ要シタルハ蓋シ左ノ理由ニ基ツクモノ、如シ

第一 德川氏時代ノ慣習ハ各地一定ナラス或ハ錯雜ニ過キ或ハ單簡ニ失シ將來複雜ナル民事ニ對スル上ニ於テ差支尠カラス故ニ各國ノ立法例ヲ參酌シ且ツ慣習ヲ取舍シ更ニ正確ニシテ秩序整然タル成文法ヲ制定シテ各人ノ權利關係ヲ明カニシ且ツ内外交通ノ益頻繁ナル時ニ於テ諸般ノ法律行爲ヲ行フニ當リ支障ナカ

ラシメントスルコト

第二 在來ノ通商條約ハ國權國利ノ上ニ於テ損害尠カラサルヲ以テ之ヲ改正スルノ必要アリ隨テ之ヲ改正スルニ牽連シテ完全ナル法典ヲ制定施行シ外國人ヲシテ我カ法律保護ノ下ニ安堵セシムルノ急務タルコト

明治三年一月太政官ニ制度取調局ヲ置キ先ツ佛國ノ法典ヲ翻譯セシム、其ノ譯文カ爾後ノ立法者并ニ司法官ノ參考ニ供セラレ間接ニ裁判例ノ基礎ヲ爲シ法律社會ニ一ノ針路ヲ示明シタルノ效亦少シトセス、明治八年ノ夏政府ハ民法編纂委員ヲ命シ民法ノ編纂ニ從事セシム、該委員ハ九年六月其ノ起草ニ著手シ十一年四月草案ヲ脱稿ス、該草案ハ第一編人事、第二編財産及ヒ財産所有權ノ種類、第三編財産所有權ヲ得ル方法トナセリ其ノ編別ノ體裁ヲ初メ其ノ内容亦佛國民法ヲ摹倣シタルモノニシテ一言以テ之ヲ評スレハ佛國法典ノ翻譯ト逕庭ナシト

謂フモ亦誣言ニ非サルナリ、政府ハ此ノ草案ヲ以テ満足セス更ニ歐米ノ立法例及ヒ學說ヲ參酌シ最モ完全ナル法典ヲ編纂センコトヲ望ミ

明治十二年佛國人ボアンナード氏ニ命シ草案ヲ起草セシム

明治十三年四月新ニ民法編纂局ヲ置キ委員ヲシテボアンナード氏ノ草案ヲ審議セシム、明治十九年三月ニ至リ財産編及ヒ財産取得編ヲ脱稿セリ、十九年民法編纂局ヲ廢シ更ニ法律取調委員ヲ置キ條約改正ノ必要ニ關聯シ法典編纂ヲ速成セシメント試ミタルモ事成ラス、同二十年更ニ外國ノ法律又ハ司法事務ニ精通セル學者ヲ集メ報告委員トシ以テ原案ノ審査及ヒ説明ノ任ニ當ラシメ委員總會ニ於テ逐條審議セシメ遂ニ明治二十三年四月ニ至リ財産編、財産取得編ノ一部、債權擔保編及ヒ證據編ヲ公布シ、同年十月ニ至リ人事編、財産取得編ノ殘部ヲ公布シ、何レモ明治二十六年一月一日ヨリ之ヲ施行スヘキコトヲ命シタリ

舊民法ノ公布

明治二十三年公布ノ民法ハ學理ニ照シ實際ニ考ヘ缺點多キコト及ヒ其ノ我カ國俗民情ニ適セサルコトヲ痛論スル者多ク帝國議會ノ議決ヲ經テ明治二十五年十一月民法全部修正ノ爲メ明治二十九年十二月三十一日迄其ノ施行ヲ延期スル旨ヲ公布セラレタリ翌二十六年三月法典調査會ヲ設ケ委員中ヨリ起草委員ヲ命シ修正案起草ノ任ニ當ラシメ其ノ案成ルニ隨ヒ委員會ニ於テ之ヲ議定セシム、二十八年ノ末ニ至リ民法中總則、物權及ヒ債權ノ三編ヲ議了シ、二十九年一月政府ハ之ヲ帝國議會ニ提出シ議會ハ些少ノ修正ヲ加ヘテ之ヲ可決シ、同年四月二十八日右三編ヲ公布スルニ至レリ但シ實施ノ期日ハ別ニ勅令ヲ以テ定ムルコト、セリ、又舊法典ノ人事編及ヒ財產取得編中ノ相續遺贈並ニ夫婦財產契約ニ關スル分部ハ親族編及ヒ相續編トシテ明治三十年六月民法施行法及ヒ其ノ他ノ付屬法律ト共ニ公布ノ運ヒニ至レリ而シテ同年七月十六日ヨリ其ノ全部ヲ施行セラレタリ

新民法總則物權及ヒ債權編ノ發布

同親族、相續編ノ發布

明治二十三年ノ法律ハ主義體裁內容其ノ他種々ノ條項ニ關シ世論ノ批難ヲ受ケタリ其ノ重ナル點左ノ如シ

第一明治二十三年ノ民法ハ其ノ主義ニ於テ佛蘭西法律ノ系統ニ屬スル一ニノ立法例ヲ參酌シタルニ過キス、其ノ主義ハ自然法ノ法理ニ基ケルモノナリ、然ルニ近世法理ノ進歩ハ最早自然法ノ存在ヲ認メス法ハ民俗慣習ニ伴ヒ歴史的ニ發生スルモノナリトノ理論行ハル、ニ及ヒ佛蘭西法系以外ニ於テ數多ノ立法例ヲ生スルニ至レリ、故ニ自然法ノ主義ニ基カスシテ我カ日本ノ民俗ニ適合セラル法典ヲ廣ク最進ノ立法例ニ參酌シテ編纂スルノ必要アリトス

第二明治二十三年ノ民法ハ體裁及ヒ編別其ノ宜シキヲ得ス、何トナレハ編別ニ關シテハ第一人事編ニ於テ人格及ヒ能力ニ關スル規定ト親族關係トヲ混同シ、第二財產編ニ於テハ互ニ性質ヲ異ニセル物權人權ヲ合セテ之ヲ一編トシ、第三財產取得編ニ於テハ家督相

續ノ規定ヲ其ノ中ニ包括シ、第四債權ニ關スル規定ノ一部分タル債權擔保ノ事項ヲ獨立ナル一編トシ、第五證據編ナル一編ヲ設ケテ民法中ニ手續法ヲ包括セシメ、又時効ニ關スル規定ヲ該編中ニ置キ、タルカ如キハ適正ナル編別ナリト謂フヲ得ス、且ツ法文翻譯體ニシテ冗長ニ失シ重複ヲ免カレヌ

第三明治二十三年ノ民法ハ其ノ内容トシテ往々單ニ私法上ノ權利義務ニ關スル規定ノミナラス公法若クハ手續法ニ關スル規定ヲ包含ス、而シテ一方ニ於テハ目下ノ時勢ニ必要ナル規定ヲ設ケサルモノ多シ、例ヘハ國民分限ニ關スル規定ハ公法的ノ性質ヲ帶フルモノナルニ拘ハラス之ヲ人事編中ニ規定シ、又財産編中ニ公用徵收若シクハ水利ニ關スル行政上ノ規定ヲ插入シ、不動産登記ニ關スルコトヲ定メ、又民事訴訟法ノ規定ニ屬スヘキ證據ニ關スル事項ヲ規定シタル等ハ其ノ内容ヲシテ錯雜ナラシムルノ嫌アリ、然

ルニ一方ニ於テハ近時經濟ノ發達ニ伴ヒ其ノ適用日ニ多キヲ加フル法人ニ關スル規定其ノ他期間ノ計算物權ニ關スル總則、廣告ノ效力ノ如キニ關シテハ規定スル所不備ナルヲ免レヌ

新民法ノ編纂者ハ明治二十三年ノ法律ニ關スル跡ニ鑑ミ其ノ修正ノ方針ニ付テハ公法上ノ規定ハ之ヲ行政法ニ讓リ、手續並證據ニ關スル規定ハ之ヲ民事訴訟法又ハ其ノ他ノ手續法ニ讓リ、或ハ定義引例等ハ勉メテ之ヲ避ケ、其ノ他字句ヲ簡明ニシ、文例ヲ同一ニスルコトヲ勉メ、又廣ク獨、佛、白、奧、蘭、瑞、英、米等諸國ノ法律ヲ參酌シ舊慣故法ヲ取舍シ、其ノ編次ノ體裁ニ付テハ理論及ヒ便宜ニ基キ之ヲ五編ニ分テリ、第一編總則、第二編物權、第三編債權、第四編親族、第五編相續是ナリ、親族及ヒ相續ノ編ニ於テハ最モ舊慣故法ヲ參酌シ就中親族編ニ於テハ戶主家族ノ關係ヲ明カニシ、又相續ニ付テハ舊民法ハ之ヲ以テ財産取得ノ原因トシ、財産取得編中ニ之カ規定ヲ設ケタリト雖モ、我國ニ於

テハ相續ハ家督相續ヲ主トシ財產ハ家督ニ伴ヒテ相續人ニ移轉スルニ過キス故ニ新民法ニ於テハ特ニ之ヲ分離シテ一編ト爲シ凡ノ相續ハ家督ヲ承繼スルモノト爲シ財產ヲ取得スルコトアルハ單ニ其ノ結果ニ過キササルヲ原則トセリ
民法施行條例ハ民法ノ改正ニ伴ヒ改正ヲ加ヘ明治三十一年六月法律第十一號ヲ以テ頒布セラレタリ

第二節 商法

商法

幕府時代ノ商法

徳川氏時代ニ在リテハ士農工商ノ別ヲ立テタルヲ以テ商人ハ社會ニ於ケル一ノ階級ヲ爲シタリト雖モ商事ニ關スル特別ナル法令ノ備ハリタルモノナシ諸商勸業及ヒ濫資征推法度諸商人仲間組合存廢兩替屋書肆旅人宿質屋古著屋古鐵買物價準則市塵商估并^{文武}市籍寄名者令條御用達町人文武藝術奉公人諸日雇駕籠車馬魚鳥野菜諸食物商湯屋

髮結遊女并隱賣女歌舞妓淨瑠璃并女藝者雜業雜商遊民資財用器定理布令金銀錢通用楮幣秤布帛定尺及絲綿衣服分銅及減金銀箔諸色賣買推放布令米穀酒茶種綿實及水油材木藥種藥艸人參等時々ノ單行令アルノミ又商事ニ關スル慣例ナキニ在ラサリシモ其ノ慣例ハ地方及ヒ商業ノ種類ニ因リテ一定ナラス例ヘハ商人ト商人ニ非サルモノヲ區別スルノ標準商業帖簿ノ種類名稱用法及ヒ保存期限又ハ商事上ノ抵當ノ如キ各地方各習慣ヲ異ニシ又吳服油材木米穀酒薪炭等各種ノ商業ニ因リテ慣習ヲ異ニスルカ故ニ管ニ全國普通ノ慣習ナキノミナラス地方ノ慣習ト雖モ又區々タルヲ免レサリキ又發達シタル商業社會ニ伴フヘキ爲換手形組合延賣買其ノ他信用ニ關スル慣例ノ如キハ一定ノ地方例ヘハ大坂長崎等ニ於テ發生シタルモノアリト雖モ其ノ行ハル區域頗ル狹隘ナルヲ免レサリキ要スルニ維新以前ニ在リテハ封建制度ノ結果トシテ各地ノ交通離隔セラレ且ツ商人ヲ賤視シタ

ルカ爲メ、商業ノ發達ヲ妨ケ其ノ範圍ヲ狹少ニシ且ツ之ニ關スル慣例ヲ區々タラシメタリ、茲ニ維新以前ノ一般商事ニ關スル慣例ヲ記述スルコトヲ省畧ス

維新ノ後政府ハ他ノ法典ノ編纂ニ著手スルト同時ニ商事ニ關シテモ畫一ノ法ヲ全國ニ施行スルコトヲ必要トシ、明治十四年太政官中ニ商法編纂委員ヲ置キ其ノ調査ニ著手セシム、尋テ之ヲ廢シ更ニ會社條例編纂委員ヲ置キ、又破産法編纂委員ヲ置ク、尋テ又之ヲ廢シ、更ニ商法編纂委員ヲ置キ、以テ商法草案編纂ノコトヲ掌ラシム、明治二十年十月更ニ法律取調委員ヲ置キ、他ノ法律ト共ニ商法ノ編纂ヲ掌ラシム、而シテ法律取調委員會ノ議決ヲ經テ初メテ元老院ノ議ニ附シタルモノハ實ニ商法ニシテ、其ノ第一編第一章第六章ハ明治二十一年十月ヲ以テ元老院ノ議ニ付シ、明治二十二年一月ニ至リ更ニ其ノ全部ヲ下付セリ、元老院ニ於テハ調査委員ヲ設ケ後チ、又審査委員ヲ設ケ、前後數十回ノ會

議ヲ經テ明治二十二年六月同院ノ可決スル所トナリ、明治二十三年三月之ヲ發布シ、翌年一月一日ヨリ施行スヘキコト、セシカ、二十三年十二月ニ至リ帝國議會ニ於テ其ノ實施ヲ延期シ、民法ト共ニ二十六年一月ヨリ施行スヘキコトヲ議決シ、二十五年六月ニ至リ更ニ二十九年十二月マテ其ノ實施ヲ延期スヘキコトヲ議決シ、政府ハ之ニ同意ヲ表セリ、但シ會社法、手形法、破産法ハ商事發達上之ヲ實施スルノ急務ナルヲ認メラレ、少シク修正ヲ加ヘ二十六年七月一日ヨリ之ヲ實施セリ、明治二十三年ノ商法カ會社、手形、破産ノ部ヲ除キテハ修正ノ爲メ延期スルニ至リタルハ重ニ左ノ如キ論難ニ基キタルモノナリ

第一 法典ヲ編成スルニ當リテハ各其ノ規定ノ本領及ヒ範圍ヲ明定スルコトヲ最モ緊要トス、然ラサレハ規定ハ徒ニ冗漫ニ流レ條項ハ空シク浩瀚ニ陷井ルノ弊アルノミナラス重複牴觸脫漏等ノ虞ナキ能ハス、舊商法ハ民法ト起草者ヲ異ニシ且ツ其ノ規定ノ本領

及ヒ範圍ヲ明定セサルカ故ニ上述ノ弊、法文ノ上ニ表ハル、モノ
少ナシトセス

第二 商法ハ其ノ專門家ニ非サル人(獨逸人リヨスレール氏)ノ起草ニ
成レルヲ以テ商事商人其ノ他ノ觀念錯雜ニシテ明確ナラサルモ
ノ少カラス

第三 商法ハ外國法ニ倣摹スルニ過キ本邦ノ慣例ヲ參酌スルコト少
キカユエニ其ノ規程我カ慣習ニ反スル甚シキモノアリ

明治二十三年ノ商法ハ上述ノ缺點アリシヲ以テ政府ハ法典調査會ヲ
設ケテ其ノ修正ニ著手セリ而シテ法典調査會ニ於テハ既成法典ヲ基
礎トシ、我國ノ慣習外國ノ立法例及ヒ國際會議ノ決議、實業家ノ建議等
ヲ參酌シ既成商法延期說ノ理由ニ鑑ミ廣ク全國商業會議所ノ意見ヲ
諮ヒ各地ノ商慣習ヲ調査シテ實際ニ適シ法理ニ合スルコトヲ勉メタ
リト謂フ其ノ要領ヲ擧クレハ左ノ如シ

第一 商法ハ舊商法カ商事ニ於テ本法ニ規程ナキモノニ付テハ商慣
習及ヒ民法ノ成規ヲ適用スルト規定シタルヲ改メテ商事ニ關シ
本法ニ規定ナキモノニ付テハ商慣習法ヲ適用シ商慣習ナキトキ
ハ民法ヲ適用スト改メ舊法ノ主義ヲ正確ナラシメ民法ヲ適用ス
ルニ先チテ商慣習ニ從フノ旨趣ヲ明カニセリ

第二 商法ハ商行為ニ關スル民法ノ特別法タルノ主義ヲ確立シ民事
商事ニ通スヘキ規程ハ總テ之ヲ民法中ニ編入セリ例ヘハ差圖債
權及ヒ無記名債權ノ買入並ニ讓渡ニ關スル規定ノ如シ從テ是等
ノ規程ハ商法中ヨリ除去セラレタリ

第三 商法ニ於テハ會社、商行為及ヒ手形ハ特別ナル形式ヲ有シテ、商
法ノ規定中重要ナル地位ヲ占ムルモノナルヲ以テ、之カ爲ニ各、獨
立ナル一篇ヲ設ケ、商法ヲ分テ第一編總則、第二編會社、第三編商行
爲、第四編手形、第五編海商ノ各編トシ、破産法ハ獨リ商事ノミナラ

ス民事ニ通シテ一般ニ之ヲ設クルノ必要アリ仍テ之ヲ商法中ヨリ分離シテ一ノ特別法律トスルノ方針ヲ取レリ

第四 商法ハ民法ト同一ノ修正方針ヲ取り公法並ニ手續ニ關スル規定ハ之ヲ行政法其ノ他ノ手續法ニ讓リ民法通則ヲ以テ足レルコトハ毫モ其ノ規定ヲ設ケス單ニ商行爲ニ關シテ特別規定ヲ必要トスルモノ、ミニ付之カ規定ヲ設ケタルヲ以テ重複牴觸スルコトナク二法統一ヲ保チ又定義引例等ノ煩ヲ避ケタリ

第五 商法ハ舊慣ヲ保存スルヲ務メ例ヘハ支配人、番頭、手代等ノ名稱ヲ存シ、之ニ關スル規定ヲ設クルト同時ニ、新ニ會社ノ合併株式合資會社及ヒ外國會社倉庫營業ニ關スル規程ヲ新設シタル等舊商法ノ闕典ヲ補足シタルモノ尠カラス

斯ノ如キ方針ヲ以テ舊商法ニ根本的修正ヲ加ヘタル新商法ハ明治三十二年三月之ヲ公布シ同時ニ詳密ナル施行法ヲ定メタリ、今茲ニ其ノ

詳細ヲ述フルノ違ナキヲ以テ左ニ新商法規定ノ綱目ヲ示ス

第一編 總則、

第一章法例、第二章商人、第三章商業登記、第四章商號、第五章商業帳簿、第六章商業使用人、第七章代理商、

第二編 會社、

第一章總則、第二章合名會社、第一節設立、第二節會社ノ内部ノ關係、第三節會社ノ外部ノ關係、第四節社員ノ退社、第五節解散、第六節清算、第三章合資會社、第四章株式會社、第一節設立、第二節株式、第三節會社ノ機關、第一款株主總會、第二款取締役、第三款監查役、第四節會社ノ計算、第五節社債、第六節定款ノ變更、第七節解散、第八節清算、第五章株式合資會社、第六章外國會社、第七章罰則、

第三編 商行爲、

第一章總則、第二章賣買、第三章交互計算、第四章匿名組合、第五章仲立營

業、第六章問屋營業、第七章運送取扱營業、第八章運送營業、第一節物品運送、第二節旅客運送、第九章寄託、第一節總則、第二節倉庫營業、第十章保險、第一節損害保險、第一款總則、第二款火災保險、第三款運送保險、第二節生命保險、

第四編 手形、

第一章總則、第二章爲替手形、第一節振出、第二節裏書、第三節引受、第四節擔保ノ請求、第五節支拂、第六節償還ノ請求、第七節保證、第八節參加、第一款參加引受、第二款參加支拂、第九節拒絕證書、第十節爲替手形ノ複本及ヒ謄本、第三章約束手形、第四章小切手、

第五編 海商、

第一章船舶及ヒ船舶所有者、第二章船員、第一節船長、第二節海員、第三章運送、第一節物品運送、第一款總則、第二款船荷證券、第二節旅客運送、第四章海損、第五章保險、第六章船舶債權者、

民事訴訟法

民事訴訟手續ノ沿革

本法ハ三十二年六月十六日ヨリ付屬法ト共ニ施行ヲ命セラレタリ

第三節 民事訴訟法

我國古來大寶律令若クハ徳川氏百个條等ノ中ニ於テ民事訴訟ニ關スル規程ヲ設ケ又ハ民事訴訟ニ關シ慣例ヲ爲セルモノ無キニ非サリシモ、特ニ民事訴訟ニ關シ獨立シテ法典ノ體裁ヲ爲シタルモノナシ、明治六年七月(第二百四十七號)ニ至リ訴答文例ナルモノヲ定メラレタリ、訴答文例ハ民事訴訟法ノ規程ニ屬スルモノヲ總括スルニ非スシテ、只訴狀及ヒ之ニ對スル答書ノ方式ヲ定メタルニ過キスト雖モ、民事訴訟ニ關シテ獨立ナル規程ヲ設ケタルハ之ヲ以テ嚆矢トス、且ツ明治二十三年三月(法律第二十九號)現行民事訴訟法發布以前ニ在リテハ民事訴訟ヲ提起スルニ付キテノ方法ヲ定メタルモノハ訴答文例以外ニ之ヲ求ムル能ハサルヲ以テ此ニ其ノ概要ヲ記述スヘシ

訴答文例ハ二卷五十條ヨリ成ル、第一卷ニ於テハ原告人ノ訴狀ニ關スルコトヲ規定シ、第二卷ニ於テハ被告人ノ答書ニ關スルコトヲ規定シタリ、該規定ノ外第一卷及ヒ第二卷ニ掲ケタル各種ノ訴狀及ヒ答書ノ雛形ヲ添ヘテ附録トセリ

訴答文例ノ外、明治五年六月第百八十七號身代限規則ヲ達シテ身代限抵償トシテ差押フヘカラサル品類等ヲ華士族平民各別ニ規定シ、同六年十一月第三百六十二號布告ヲ以テ出訴期限規則ヲ定メ、同年太政官達ヲ以テ負債者身代限ニ遇フ節其ノ者ニ對シ貸金穀其ノ他義務ヲ負フヘキ者定約期限未滿内ノ處置方ヲ規定シ、郵便ヲ以テ訴狀ヲ差出スヘカラサル旨ヲ布達シ、明治七年五月司法省達甲第九號裁判所取締規則ヲ定メ、同年九月人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟取扱ニ付假規則ヲ定メ、明治八年一月布告第六號負債者失踪後ノ訴訟成例ヲ定メ、同年二月第三十號民事訴訟審判ハ人民一般ニ傍聽ヲ許シ、同年六月布告第

百三號裁判事務心得ヲ定メ、明治九年九月區裁判所假規則ヲ達シ、明治八年五月布告第九十三號及ヒ明治十年二月布告第十九號ノ兩度ニ控訴上告手續並ニ民事上告豫納金手續ヲ定メ、同年九月布告第六十六號利息制限法ヲ定メ、並ニ無利息貸金預ケ金地代手附金等利息請求方ヲ示シ、明治十三年五月甲第一號代理人規則ヲ定メ、明治十四年十二月布告第八十三號治安裁判所及ヒ始審裁判所ノ權限ヲ定メ、明治十八年三月司法省内達第一〇五七號民事裁判言渡書式ヲ一定スル等其ノ他時ニ太政官司法省等ノ布達若クハ同指令等ニ依リ民事訴訟手續ノ慣例成例ヲ爲シタルモノアリト雖モ、民事訴訟法制定前ニ於テ稍、法典ノ體裁ニ類似シタル形式ヲ具ヘタルハ訴答文例ノミナリシ

維新後政府ハ實體法ノ編纂改良ヲ謀ルト同時ニ手續法ノ制定ヲ必要トシ、明治九年九月元老院ニ命スルニ民事訴訟法ノ取調ヲ以テシ、明治十七年司法省ニ於テ民事訴訟法取調委員ヲ命ス、案成ルニ及ヒ更ニ法

律取調委員ヲシテ調査ノ上修正ヲ加ヘシメ終ニ明治二十三年三月ニ至リテ之ヲ公布シ二十四年一月ヨリ實施スルコト、セリ、是レ即チ現行民事訴訟法トス

現行民事訴訟法

現行民事訴訟法ハ主トシテ獨逸訴訟法ノ主義ヲ採用シタルモノニシテ殊ニ我國ノ立法者カ訴訟法ハ一ノ公法ニシテ且ツ形式法タルコトヲ認メ、而シテ能ク其ノ分域ヲ守リタルニ因リ、其ノ制定ノ當時ニ於ケル他ノ諸法典ニ比シテ缺點尠シトス、本法ハ總則、第一審ノ訴訟手續、上訴、再審、證書訴訟、強制執行、公示催告手續、仲裁手續ノ八編ニ分テ頗ル整備ノ規定ヲ設ケシト雖モ本法ハ元ト明治二十三年ノ民法及ヒ商法ニ對スル助法トシテ制定セラレタルモノナルヲ以テ後者ノ改正ニ伴ヒ早晚幾分ノ改正ヲ爲スノ必要アルヲ免レサルハシ

第四節 其ノ他附屬法令

物權ニ關スル登記〔明治三十二年二月法律第二十四號〕
〔同六月十六日ヨリ施行〕

物權登記ノ沿革

明治維新ノ舉ハ數百年ノ因襲ヲ破リ大小ノ政務ヲ更新シタレトモ藩籍奉還以前ニ在リテハ諸侯各其ノ領土ヲ私シ貢租其他土地ニ關スル制度概チ徳川時代ノ舊ニ仍リ僅ニ讓渡ナル名稱ノ下ニ土地ニ關スル權利ヲ移轉スルコトヲ認メタリ其ノ後大勢ノ推移スルニ隨ヒ藩制施行ト爲リ廢藩置縣ト爲リ凡百ノ事復タ封建時代ノ舊ヲ守ルコト能ハス明治五年始メテ土地賣買ノ禁ヲ解キ人民ノ土地所有ヲ認メ地券ノ制ヲ定メ以テ其ノ權利ヲ證明スルコト、爲セリ同六年布告第十八號ヲ以テ地所質入書入規則ヲ發布シ地所ノ質入又ハ書入ニ付テハ戶長ヲシテ其ノ證文ニ奧書證印セシムルコト、爲セリ是レ所謂戶長ノ公證ニシテ物權公示ノ方法ヲ定メタルモノ之ヲ以テ嚆矢ト爲ス其ノ後

八年布告第四百十八號ヲ以テ諸建物書入質規則並ニ賣買讓渡規則ヲ定メ建物ノ賣買讓渡又ハ書入質ニ付キ戸長ノ公證ヲ受ケシムルコト、爲シ十年ニ至リ第二十八號布告ヲ以テ此ノ規則ヲ船舶ニ準用スヘキコトヲ定メタリ十三年更ニ第五十二號布告ヲ以テ土地賣買讓渡規則ヲ定メ土地ノ所有權ノ移轉モ亦公證ヲ經サルヘカラサルモノトセリ茲ニ於テ土地、建物、船舶ニ關スル物權公示ノ方法略ホ備ハレリ、然レトモ當時ノ公證ハ第三者ニ對抗スヘキ公示タルニ止マラス當事者間ニ於ケル權利ノ證明ニ付テモ公證ヲ以テ必要條件ト爲シ公證ニ依ルニ非サレハ其ノ證明ヲ許サ、ルコト、爲セリ而シテ公證制度ノ完全ナラサルカ爲メ公證偽造二重公證等ノ弊日ヲ逐フテ多キヲ加ヘ公證ヲ以テ權利保護ノ實ヲ完ウスルコトヲ得ス乃チ十九年ニ至リ登記法ヲ制定シ戸長公證ノ制ヲ廢シテ物權ニ付キ登記ヲ爲サシムルコトヲ圖リ其ノ事務ヲ舉ケテ登記官吏ノ職掌ト爲シ二十年二月ヨリ之ヲ施

行シタリ登記法ノ規定ニ依レハ物權關係ハ當事者間ニ在リテハ登記ノ有無ヲ問ハスシテ其ノ效力ヲ生スヘシト雖モ之ヲ登記スルニ非サレハ第三者ニ對抗スルコト能ハサルカ故ニ登記ハ第三者ヲ保護スルカ爲ニ設ケタル制度ニシテ全ク公示ノ方法タルコトヲ知ルヘシ、是レ公證ト登記ト其ノ效力ノ異ナレル要點ナリ次テ二十年及ヒ二十三年ノ兩次多少ノ修正ヲ爲シタリト雖モ民法ノ制定アルニ隨ヒ土地又ハ建物ノ登記ニ關シテハ自ラ其ノ規定ヲ改メ且ツ新ニ規定ヲ設クル必要アルヲ以テ政府ハ法典調査會ヲシテ法案ノ調査ヲ爲サシメ終ニ明治三十二年二月法律第二十四號ヲ以テ不動産登記法ノ公布ヲ見ルニ至レリ

民事訴訟法施行條例

民事訴訟法施行條例

〔明治二十三年七月法律第五十號 同二十四年一月一日ヨリ施行〕

民事訴訟法實施前ニ提起シタル訴訟ニ付テノ訴訟手續ハ同法ニ依リ

行及ヒ非訟事件ニ關ル費用ハ執達吏手数料規則ニ定メタルモノヲ除ク外此ノ規定ヲ準用シテ之ヲ算定ス又同伴ニ關シテ保證人若クハ管理人ヲ任命シタルトキハ其ノ費用ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

民事訴訟用印紙法

民事訴訟用印紙法

〔明治二十三年八月法律第六十五號 同二十四年一月一日ヨリ施行〕

民事訴訟書類ノ正本及ヒ調書等ハ印紙ヲ貼用スヘキモノト爲シ財産權上ノ請求ニ係ル第一審ノ訴狀ニハ訴訟物ノ價額ニ應シ印紙ヲ貼用ス即チ其ノ價額金五圓マテ二十錢以上十二級ニ分チ五千圓マテ二十五圓ニ至ル五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ二圓ヲ加フ訴訟物ノ價額ハ民事訴訟法第三條乃至第六條ニ從ヒ算定ス財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ付テハ其ノ訴訟物ノ價額ヲ百圓ト看做シテ印紙ヲ貼用ス本訴ト反訴ト其ノ目的カ同一ノ訴訟物ナルトキハ反訴ノ訴狀ニ印紙ヲ

貼用スルヲ要セス控訴狀ニハ前規定ノ半額上告狀ニハ其全額ノ印紙ヲ加貼ス抗告故障證據調ノ申立假差押及ヒ假處分ノ申請判決ノ送達ヲ求ムル申立執行力アル正本ヲ求ムル申立等ノ書類ニハ五十錢ノ印紙ヲ貼用スルモノトス又和解不調及ヒ督促手續ニ付キ訴カ區裁判所ニ繫屬スルトキ再審ヲ求ムルノ訴狀原狀回復ノ申立答辯書等ニ關スル印紙貼用方ヲ規定ス

家資分散法

家資分散法

〔明治二十三年八月法律第六十九號 同二十四年一月一日ヨリ施行〕

民事訴訟法ノ強制執行處分ニ因リ義務ヲ辨濟スル資力ナキ債務者ニ對シテハ管轄裁判所ハ職權又ハ申立ニ因リ決定ヲ以テ家資分散者タルノ宣告ヲ爲ス此ノ決定ハ口頭辯論ヲ要セスシテ之ヲ爲スコトヲ得又此ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得セシム家資分散者ハ其ノ宣告ヲ受ケタル日ヨリ選舉權及ヒ被選舉權ヲ失フ復權ニ付テハ

商法第千五十五條以下ヲ準用スルモノトス商法及ヒ本法施行以後ニ於テ從前ノ法律中身代限處分ヲ受ケタル者ニ對シ公權ノ喪失ヲ定メタル條項ハ破産又ハ家資分産ノ宣告ヲ受ケタル者ニ對シ效力ヲ有ス

非訟事件手續法 〔明治二十三年十月法律第九十五號〕
〔同二十六年一月一日ヨリ施行〕

非訟事件手續法

本法ハ之ヲ第五章ニ分チ民法ノ規定ニ從ヒ區裁判所ノ認可又ハ許可ヲ求ムル申請手續、失踪ノ推定宣告又ハ財産占有其ノ他ノ請求手續、相續ノ限定受諾ニ關スル手續、國ニ屬スル相續財産領收ノ手續、財産ノ封印及ヒ目錄調製ノ手續等ヲ規定ス、而シテ本法ハ民法及ヒ商法ノ修正ニ伴ヒ三十一年六月其ノ全部ヲ改正シ三十二年三月其ノ一部ヲ修正シ而シテ其ノ修正ノ大部分ハ商法ニ關スルモノトス

供託法 〔明治二十三年七月〕
〔勅令第四百十號〕

供託法

供託ニ關スル規定ヲ設ケシハ明治二十三年七月勅令第四百十五號供託規則ヲ以テ始メトス、同規則ニ依レハ法律ノ規定ニ依リ供託スル金錢及ヒ有價證券ハ大藏省預金局ニ於テ之ヲ保管ス、供託シタル有價證券償還金ノ利子又ハ其ノ配當金ハ有權者ヨリ預金局ニ其ノ受取ヲ請求スルトキハ預金局ハ之ヲ受取り之ヲ代供託物又ハ附屬供託物トシテ保管スヘシ

供託シタル金錢ハ拂込ノ日ヨリ六十日ヲ過クルトキハ拂込ノ翌月ヨリ拂戻請求ノ前月マテ通常預金ノ利子ヲ付スルコト、セシカ二十六
年七月勅令第七十五號ヲ以テ同年十二月二日以後ハ利子ヲ付スルコトヲ廢止セリ、明治二十六年四月公布ノ新民法ニ於テハ供託所ニ付キ法令ニ別段ノ定メナキ場合ニ於テハ裁判所ハ辨濟者ノ請求ニ因リ供託所ノ指定及ヒ供託物保管者ノ選任ヲ爲スコトヲ要スト定メタリ
明治三十二年二月法律第十五號ヲ以テ供託法ヲ制定ス、本法ニ於ケル

改正ノ要點ハ金錢及ヒ有價證券ノ供託ハ金庫ニ於テ之ヲ保管シ、供託ノ金錢ニ對シテハ供託ヲ受ケタル翌月ヨリ拂渡請求ノ前月マテ大藏大臣ノ定メタル利息ヲ拂フコトヲ要ス、金錢及ヒ有價證券ニ非サル供託物ニ付テハ司法大臣ハ之ヲ保管スヘキ倉庫營業者ヲ指定スルコトヲ得ヘク、倉庫營業者ハ其ノ營業ノ部類ニ屬スル物ニシテ其ノ保管シ得ヘキ數量ニ限り之ヲ保管スル義務ヲ負フト同時ニ供託物ヲ受取ルヘキ者ニ對シ一般ニ同種ノ物ニ付テ請求スル保管料ヲ請求スルノ權利アリトス

民事訴訟法ノ補則

民事訴訟法ノ補則

〔明治二十三年法律第四百四號 同二十六年一月一日ヨリ施行〕

本則ハ第一章ヲ婚姻事件及ヒ養子縁組事件ノ訴訟手續ト爲シ、婚姻縁組ノ無効、離婚、離縁又ハ同居ヲ目的トスル訴訟並ニ婚姻又ハ縁組ノ不成立ニ關スル訴訟ノ裁判管轄、檢事ノ立會、訴ノ併合、口頭辯論、審訊、判決、

假執行、假處分及ヒ檢事ノ起スコトヲ得ヘキ無効ノ訴等ニ關スル諸件ヲ規定シ、第二章ヲ禁治產事件ノ訴訟手續ト爲シ、禁治產ノ裁判管轄、申立ニ表示シタル事實ノ探知、證據方法調査、證人及ヒ鑑定人ノ訊問、宣誓、治產ヲ禁セラルヘキ者ノ訊問、禁治產ノ宣言、身體監護、財產保存、訴訟手續ノ費用、申立却下ニ對スル即時抗告、宣言ニ對スル不服ノ訴、辯護士ノ附添、宣言ノ取消、禁治產ノ解止等ニ關スル諸件ヲ規定ス、三十一年六月法律第十三號ヲ以テ人事訴訟手續法ヲ制定セルニ依テ廢止セラル

明治法制史

終

附言

清浦奎堂先生明治法制史ヲ著述シテ世ニ公ケニセラル、ニ際シ其ノ得ル所ノ利ハ舉ケテ之ヲ貧兒育養、少年感化、免囚保護等ノ公共事業費ニ義捐スルカ爲メニ予ニ版權其ノ他出版ニ關スル總ヘテノ處理ヲ一任セラル、今ヤ我國諸般慈善事業ノ必要ニ迫レルニモ拘ハラス往々大方ノ同情ヲ得ルノ困難ナルカ爲メニ動モスレハ輒々其ノ發達ヲ見ル能ハサルノ憾ミアル時ニ方リ偶マ此ノ美舉ニ接スルヲ得タルハ斯業ニ取リテハ實ニ大旱ニ驟雨ヲ獲テ苗乍々

勃興スルノ想アリト謂フヘシ予輩斯業ニ志アル者
深ク先生ノ厚意ヲ感謝スルト共ニ進ンテハ又先生
ノ志ヲ空シカラサラシメンコトヲ努メサルヘカラ
ス聊カ一言以テ之ヲ卷尾ニ付ス

明治三十二年六月

小河滋次郎謹述

21
24

明治三十二年六月十日印刷
明治三十二年六月十四日發行

正價金貳圓

著作者

清浦奎吾
東京市芝區城山町一番地

版權所有者

小河滋次郎
東京市小石川區若荷谷町
三十三番地

發行兼
印刷者

鈴木敬親
東京市神田區裏神保町七番地

印刷所

同志社活版所
東京市神田區錦町三丁目一番地

東京市神田區裏神保町七番地

發行所

書肆明法堂

電話(本局)一四三六番



502

~~322.17~~
K195

W322.1
K195
60

~~322.17~~
K195

~~322.17~~
K195

日
付

票

322.16
K195

最高裁判所図書館



000125159

